

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑧）

高島敬明

前回は、ラゴス港の様子そしてラゴスの町の日本人会のお話しでした。

ラゴス港は比較的安全な場所でした。頭の上のカゴにボイルした牛のレバーを乗せて女の子が売りに来る平和な光景でした。作業員の中の何人かがフレンドになるんだ、と切り売りのレバーを買って食べています。美味しいらしいのですが、現地の、しかも十分ボイルしたのかどうかも分からないものを食べることは禁じられていました。注意するのですが友達になるんだと、背の高い女の子が来るたびにレバーを食べていました。彼は帰国後に風土病を発症してしまいました。こぶとり爺さんのような、硬くて直径が2cm高さ1cmほどのこぶが忽然と現れます。一週間もすれば消えてしまいますがまた違う場所にこぶができるといった具合です。医者からはもう一度アフリカに行って向こうの病院で直すしかないですね、と日本では対処できないとのことでした。調べたあげくアフリカの風土病研究機関がある群馬大学医学部に行けばいいことが分かり、彼は群馬に行って治療することになりました。後日談を聞きますと、何か月か掛かったようですが何とか直ったと聞きました。

日本船が入ると時々船の食事に招待されます。何人か呼ばれていますがい服を着て船内でのパーティに参加します。決まってテレビには最新のビデオが画面に映っています。それに釘付けになっていると食事とお酒が出て来ます。巻きずし、刺身、日本酒、日本のビールなどが出て来ます。懐かしい日本の味です。たまには船長も出席されますが、船の中では上下関係が厳しいと見えて船長への言葉は敬語が使われていました。たいていは航海長が対応されました。日本からアフリカ西海岸まで来るのですから当然パナマ運河を通って来ます。またイタリアに立ち寄って機器を積み込んだ時はスエズ運河を通って来たとか、海の男のロマンチックなお話を聞きながらの食事です。毎



ラゴスの市場（2005年）ウィキペディアから

日ラゴス港外の小エビを使った料理ばかりでしたから感激しました。

そんな中、またもや大きな事故が起こってしまいました。港での当社の作業員の中で非常に仕事のできる人で、専門はクレーンの運転手ですが何事も率先してやってくれるS班長の事故でした。船から荷物を下ろす仕事はその港の乙仲業者でなければ作業はできません。乙仲業者が仕切っていて、日本船のクレーンでも触ることはできません。すべて現地の作業員が担当しますが、これはどこの港でも一緒です。船からの荷物をトレーラーに積み込む作業中に事故は起こってしまいました。仲業者と日本人の作業の接点での事故でした。トレーラーの荷台の高さが1.2m、荷物の高さが3.1mであり、4.3mの高さの荷物の上に乗って荷物を吊って来たワイヤーの取り外し作業中の事故です。下ろした荷物の上で降りて来た船のクレーンのワイヤーにつかまり、身を乗り出しての作業中に合図もしないのに現地人のクレーン運転手はそのワイヤーを緩めたのです。班長はバランスを崩して、4.3mの高さから飛び降りる様に足から着地しました。「なんだ！ 船の運転手は合図もなくワイヤーを緩めてどうしようもないな」と、冗談のように話していましたが時間が経つにつれてかかどが痛い訴える様になりました。靴下を脱がせ足を見ましたが少し腫れているようです。どうしたものか判断を迷ってしまいました。今日は日曜日だけど病

院はやっているのかな？ 本人は何ともない、申し訳ないと顔をしかめて繰り返します。だんだんと痛みも強くなっているようなので、バスの運転手に病院に行くように言って関係者はバスに乗り込みました。道すがら私はまずいことになったのではと考えました。当社のように荷物や貨物を扱っている会社の職業病のようなもので、高所から飛び降りてかかとを痛める事故は国内でも多く起こっています。怖いのはかかとの先端の踵骨（シュウコツ）骨折で、皿のような部分の骨折です。皿の骨がくっついて直ったように見えても必ず少し段差ができ後遺症が出て来ます。歩くにはその患部を踏みながら歩くので痛くて完治はなかなかできないようです。祈るような気持ちでやっと着いた病院を見るといかにも古めかしい3階建ての建物でした。中は日曜日というのに足の踏み場もないような混雑で異様な匂いが鼻に付きます。英国の植民地だっただけにインド人の医者が多いと聞いていましたが、やはり年取ったインド人の医者でした。

治療の申し込みをするため通訳が用紙に必要事項を書いて窓口に行ったようです。すると彼は費用は先払いだと、飛んできました。「何！ そんなことを言ってもお金は無いよ」「保証金は150ナイラだそうです」岸壁の作業を中断してきたのでバスには10人そこそこはいたと思います。「財布のお金を全部出してくれないか！」と呼びかけました。150ナイラは日本円で45,000円くらいですから妥当な金額でしょう。お金は現場では使わないのが原則ですから誰もそんなに持っていないのです。私が50ナイラほど、なんだかんだで150ナイラをかき集めやっと入院し、レントゲン撮影が始まりました。付きっきりでしたがブリテンの英語で全く分かりません。通訳もやっと訳していました。レントゲン写真を示しながら心配した踵骨骨折は1か月の治療が必要だとの説明があり、今日は入院するようにとのことでした。3階のかなりいい部屋に入院です。すごく大きな浴槽が1個、ベッドが一つ、これだけしかありませんがその病院では一番広い部屋とのこと。他の病室や廊下を見ても非常な混雑です。しばらくして一人前のあまり美味しくもない夕食も終わり、本人もやっ

と落ち着きました。明日の作業のこともあり、「S班長私はキャンプに帰ります」と話しました。班長は50を過ぎた人でしたが突然に「係長帰らないでくれ！ 一人にしないでくれ！」と泣き出さんばかりに哀願？ するのです。私も冷静に考えてみると、この状態の中で帰るのは無責任だ、と考え直しました。

運転手に明日迎えに来るように、と言って二人でこの病院に泊る決心をしました。とは言ってもベッドは一つしかなく、私はあまり綺麗ではない床に寝るしかないのです。その時までは床に寝ても私は睡眠をとることが出来ると思っていました。この病院では3種類の異なる制服を来た看護婦らしき女性がいるようです。白い制服にきれいな白い帽子を被っている女性、また白い制服は着ていますが帽子は被っていない女性、そしてピンクがかった制服を着た女性たちが大勢います。時間が経っても自宅に帰る人はいない様子で全員どこかで泊って行くのか、あちこちでたむろしていました。夜は更けてきましたが、まだ非常な混雑です。段ボールを見つけてきて寝付けないので床に座っていました。するとピンクの制服を着て、頭には編んだ髪が「ミミズ」に見えて仕方のない女性が二人「この部屋に泊っていいか？」と聞いて来ました。最初は何を言っているのか理解できませんでした。どうも女性としての商売をしているのか？ というとか、この病院の慣習で患者の部屋で空いているところに宿泊させるのか？ そのどちらかと思いましたが、しきりに「泊っていいか？」と聞いてくるのです。「班長どうしますか？」と笑いながら聞くと、「この痛いのには帰れ！」と一喝。それですべて終わってしまいました。非常な騒音の中、ドアを閉めてドアが開かないように工夫をして私がそこに眠りました。S班長は一晚中痛いかウンウンと痛みをこらえて唸っていました。私も一睡もできず朝を迎えました。私はこれはどんなことが有っても治療のために日本に帰国させねばだめだと心に決めていました。運転手のエマニュエルが病院に迎えに来て私と医者の方が話すこともなく病院を出てキャンプに帰りました。今回はここまでにします。 (続く)